

Ebuchebe

Vol.6

OWS

 Research and Education
 Non-profit organization
 The Oceanic
 Wildlife Society


エブオブはパラオ語でシオマネキのことです。

OWSは、海の自然環境やそこにすむ生き物たちを、様々な方法で広く紹介していくことにより、未来につながる持続的な環境保護意識の定着を目指す特定非営利活動法人です。活動に参加している方々の多くが、海に関する仕事や趣味を持ち、常日頃親しんでいる海のために「小さなことでもいいから何か協力したい」という気持ちから、地道に様々な活動をしてきました。そんな我々OWSの活動を、メンバー全員にお知らせするとともに、自然観察の中から教えられた新たな発見などもご報告するため、季刊誌「エブオブ」を発行しております。ご意見、ご感想をお寄せ下さい。

漂着物に 目を向けよう

四方を海に囲まれた日本の海岸では、多くの漂着物を見つけることができる。近くの河川から海に流れ込んだもの、隣町の港から流れ着くもの、高波で打ち上げられた沿岸にすむ動植物、遠い外国から海流に乗り長い時を経て流れ着くものなど、ありとあらゆるものが海流や潮流や風で運ばれ各地の海岸に漂着する。

普段見過ごしてしまいがちな砂浜の汀線やゴロタ石の隙間に目を向けると意外な発見があるかもしれない。

(次ページへつづく)

(写真) 8月28日(火)「海辺の生物観察と漂着物調査」の際、赤沢大川間の海岸にて発見・アカウミガメ



Contents

- | | |
|------------|-------------------|
| ●特集 | ●OWSネイチャースクール2001 |
| 漂着物に目を向けよう | 杉並学園イベント報告 |
|P1 |P4 |
| ●ミッドウェイ環礁 | ●連載 高砂淳二フォトエッセイ |
| ライターゴミ調査開始 | 「僕のオフィスは大自然」 |
|P3 |P7 |
| | ●OWSご支援のお願い |
| | サポーター募集要項など |
| |P8 |

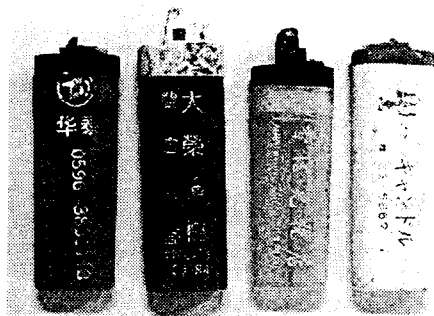
ミッドウェイ環礁 ライターゴミ調査開始！

OWSでは、ミッドウェイ環礁で繁殖するコアホウドリ・クロアシアホウドリが体内に取り込むプラスチックゴミ類について再三報告してきた。それらのプラスチック類は、餌と一緒に口移してヒナに与えられ、巣立ちできずに死んだヒナの胃中から大量に発見される。ミッドウェイのネイチャーガイドたちは、それらのゴミのうち、使い捨てライターを何とはなしに拾い集め、あつという間に1000個を超えるほどになった。OWSでは、米国魚類・野生生物局(FWS)から日本への持ち出し許可を得て、それらの流出源の調査を検討することにし、漂着ゴミの流出源に関する調査研究で活躍される鹿児島大学水産学部環境情報科学講座助教授の藤枝繁先生に調査をお願いした。8月中旬にミッドウェイからライターの一部(326個)が到着し分析を開始した。現在までの藤枝先生の調査報告をご紹介します。

100円ライターは小型で運びやすく 流出地も推定しやすい

ディスポーザブルライター(ディスポライター)は、たばこの火つけ道具として30年ほど前に開発され、低価格と利便性から急速に普及し、現在国内では火つけ道具の9割を占めると予想される。100円ライターという方が馴染みがあるかもしれない。これまで発祥国である日本と欧州が主生産国として海外輸出と国内需要を担っていたが、ここ10年で主産地が中国に集約されたようである。調査対象にディスポライターが選ばれるのは、小型で運搬回収も容易で、カラフルな色から発見し易いだけでなく、店名などのコマーシャル用のローカル情報が印刷されており、流出地の推定が可能であることからだ。

(この手法は、京都東山高校の安松貞夫先生の発案による)



ミッドウェイライターはほとんど読めないため、写真は種子島喜志鹿崎で採取したものです。左から中国、台湾、香港、日本です。中国ライターは華泰の華が簡体字です

日本からミッドウェイまで 流れ着いたライター

これまで私は鹿児島県海岸から約7,000個のディスポライターを回収し、約5,500個を分類した。その結果、鹿児島県海岸には、主として日本、台湾、中国(浙江省、福建省、広東省、香港)からディスポライターが漂着することがわかっている。今回、ミッドウェイ環礁のアホウドリ類のヒナから出たディスポライター326個の分類を行ったが、印刷情報が残っていたライターは20個で、使用国判別率4.6%、使用都市判別率0.9%とかなり低い結果となった。

結果 (326個)

- | | |
|------------------|---------------|
| ●日本 4 (愛知県三好郡:1) | ●台湾 5 (台中市:2) |
| ●中国 5 (浙江省寧波:1) | ●シンガポール 1 |
| ●中国または台湾 5 | |

上記の調査結果はあまりに数字が少なすぎるが、1999年奄美大島大和村ヒエン浜では、192個を回収し、使用国判別率37.5%、使用都市判別率9.4%であった。そのときの調査では、日本社製品(日本製とは限らない)が141個と半数以上を占め、アメリカ大陸で使用された痕跡を持つものはなかった。ディスポライターは日本発祥の製品であり、広く世界で使用されていることを考慮しても、ミッドウェイの上流にあたる鹿児島での結果を見るかぎり、日本のさらに下流にあるミッドウェイの現状を想像することはそれほど難しくないのかも知れない。

<ディスポライター調査分類法>

1.とにかく集める。

2.タンク底面記号を参考にタンク形状を分類する。

※タンク底面記号である程度製造会社は判別できる。しかしこれはあくまでも製造会社の判別であり、製造国、使用国の判別はできない。

3.タンク表面の文字を確認する。

※昼よりも夜間、単一方向からの照明を用いて表面の反射散乱から消えかけた文字を読み取り、正確に転写する。

4.地名以外に電話番号の市外局番で都市を判別する。

※中国大陸は主として0で始まる4桁、台湾は0で始まる2桁

5.文字情報しかない場合、省略文字(簡体字)は中国と判断。

6.定期的な調査により、回収量を増やし、データを増やしていく。

鹿児島大学水産学部・環境情報科学講座助教授

藤枝繁先生



<経歴> 1967年6月大阪生。1997年、日本海重油回収作業にボランティアとして参加し、これを契機に身近な海岸に迫る漂着散乱ゴミに関する調査を開始。個人研究として◇1998年薩摩半島西部海岸に漂着した大量ゴミの実態調査、漁業資材の海岸漂着に関する研究(1997年)◇指標漂着物を用いた海岸漂着物の起源と漂着特性に関する研究(1997年)などがある。